国府台女子学院小学部　　2025. 3. 1

仏教通信　「『仏説阿弥陀経』ってすごい！」　３月号

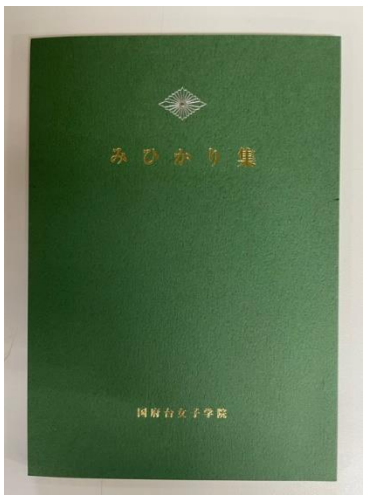
今回は仏教行事(盂蘭盆会)の時に読経する『仏説阿弥陀経(以下「阿弥陀経」と称する)』についてお話しをします。この『阿弥陀経』といえば、学校で読経するお経の中で一番長いものです。そのため、読経中に集中力が切れ、今読んでいる箇所を見逃してしまうと、再び復帰するのが困難であり、指差し確認しながら真剣に読む「難度高め」なお経として、国女の児童・生徒の間では有名です。

この『阿弥陀経』の中に「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」という一節が出てきます。この経文は「青い花はあるがまま青く光ればよい、黄色い花はあるがまま黄色く光ればよい～」と訳し、人は自分のあるがままの姿で生きるのが尊いと語っており、それぞれが個性を発揮し、その上で調和する世界が極楽浄土(阿弥陀如来の国)だと教えてくれているのです。

現代の社会や学校では、「多様性」「ダイバーシティ」「共生」といった考えが重視され、お互いの『認め合い』が目標として掲げられています。この考え自体はとても素晴らしいものだと思いますが、『認め合う』という言葉が、ともすれば「相手を理解し、受け入れる」という行為を絶対的な美徳として捉え、違いを無理に納得させようとする圧力が生じないかと危惧することがあります。人間の容姿、性質、嗜好、生物学的・社会的性別は多岐にわたり、文化、宗教、慣習も含め多様性に富んでいるこの世界で、他者の全てを理解することは、言葉で言うほど簡単なことではありません。

ここでまた『阿弥陀経』の話となりますが、「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」は「違っていることを無理して理解しようとしなくても、違ったまま、分からないままで受け入れることも大切だよ」と、阿弥陀如来が教えてくれているのだと私は思うのです。それぞれの花が、ただあるがままに、その色に応じた光を放つように、人間もまた、無理に互いの違いを理解しようとせずとも、分からないまま、違いがあることを前提とし、その違いを尊重しながら、共に生きることを目指していいのです。今回、『阿弥陀経』が語っている多様性のあり方は、私たちが目標とする「共生」のモデルケースとして参考となりましたので、皆様に紹介させていただきました。児童の皆さんは、『仏説阿弥陀経』を読経する際、「青色青光、黄色黄光～」のフレーズに、是非注目をしてみてください。合掌

小学部礼拝委員会



「青色青光。黄色黄光。赤色赤光。白色白光」は小学部『みひかり集』36ページ4行目に記載